



(絵：野口宣友)

## 南部町の民話2

# 賀祥の妖怪

むかし、むかし。賀祥の白山神社のところにあった「保禰寺」というお寺に夜な夜な「妖怪」が出るという噂話がながれつつあったげな。

稲刈りもすんだ秋の夕方、日野へ越す一人の旅僧が賀祥までたどり着いた頃、日はとっぷりと暮れてしまった。「さて、困ったことだ。どこかに一夜の宿を」と月の明かり頼りに右手の山のほうを見れば寺らしい建物が見えた。近づいてみると随分と荒れた寺だった。辺りをみると、闇の中に白く土蔵のある家がかすかに見えたので訪ねると主人がでてきた。「あの寺に一晚とめていただきたいのですが。」「それは一向に構わぬが、ワシは庄屋だがうちで一泊なさらぬか。」「いやいやもつたいないこと。無人であれば一夜の勤めをするも修行のひとつ。」「と強き言い張ったので庄屋さんは「実はあの寺はどんな人も途中で逃げ出してきました。大きな『入道』が出るからなんです。』と言ったが僧はガンとして聞かなかった。寺まで送った別れ際、お坊さんは庄屋さんに向かって「明け六つの鐘をついたら村人全員寺に集まってください。」「と言った。僧は暗い小川で身を清め、足を洗って寺に入った。顔にかかるくもの果を払いながら、掃除をした後、夜のお勤めをして食事を済ませ一人本尊の前には横になりトトロトとまどろんだ。

物音が目覚めて庫裡の戸の隙間から中を見れば困炉裏の前にドッカと座ったのは庄屋の話の「大入道」だった。見てみると「ていていこぼしはうちかや」「ああうちだぜ、誰だ」「西竹林一ツ目の鷹でござる」入ってきたのは、法衣をまとった片目の大和尚。やがてまた「ていていこぼしはうちかや」「だれだ」「東方の馬頭」長いなぎなたを手にした鬘髪の怪物。今度は優しい女の声で「ていていさまはおうちかえ」「ヨオツ、べっぴんの北方の白狐か」美しい美女が一人増えた。お坊さんは恐ろしさで一心不乱に念仏を唱える。今度は大きな鉄釜を背負って赤い腹掛けをした顔中うろこの「南方の宝魚」と呼ばれる妖怪の登場。そこで「ていていこぼしは立ち上がった。久しぶりに顔がそろった。良いごちそうがあるからボチボチ料理をして食べよう」研ぎ澄まされた「大鎌」を手に一同本堂のお坊さんの部屋の障子をあげた。驚いたのはお坊さん。命の限り高らかに念仏を唱えたところ、全身に力のみなぎるのを覚えた。咄嗟に入道たちの中に躍り出た。びっくりした妖怪たちに向かい「汝ら尊い命を奪うとはもってのほか。ていていこぼしは使い古した「槌」であらう。西竹林一眼の鷹は竹やぶに捨てられた「片目鷹」、東方の馬頭はゴミ捨て場の「馬の頭」、北方白狐は北方の死んだ「年寄り狐」、南方宝魚は村

の池に捨てられた「腐れた魚」であらう。」「と一喝した途端、妖怪の姿はスーッと消えてしまった。

明け六つの鐘が賀祥の谷に響いた。村人を前に坊さんはさわやかな声で言った。「ていていこぼしは庫裡の天井裏にある古い樺のこずち、眼を射られた鷹、馬の頭骨、老狐の死骸、池の腐った魚、いずれも成仏できなかった悲しいものたちです。これらを探してきてください。供養してやりましょう。」「賀祥の衆とともにお坊さんは死骸を集めて供養し自身の像をあわせて「六地藏」を石に刻み、巨岩に撞に打たれて「念仏」をほる。三界の精霊を祀ったのがあそこの「六地藏」。能竹の秋は静かにふけてゆく。おしまい



朝日座での公演 (天津の芝オケ)